



# 図書館だより

2015.5  
No. 23

長崎県立大学佐世保校附属図書館

〒858-8580 佐世保市川下町123  
TEL 0956-47-2191 (代表)  
<http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

## 読書が拓げる無限の世界

太田博道

(学長)

新入生諸君、入学おめでとう。これから4年間、精一杯勉強し、精一杯青春を楽しんで頂きたい。その楽しみの中には是非「読書」を加えることを奨めます。図書館を利用すれば、経費ゼロで済むのだからこんな割安な楽しみはない！

最初に、チョット関係なさそうなことを一つ。生物学的にみてヒトの特徴の一つは直立歩行することである。直立歩行が必要となる最も大きな理由は発達して重くなった脳を支えるためである。脳の発達により、ヒトは言語や文字を使えるようになった。何が言いたいかお分かりと思うが、このように文字による楽しみを享受できるのはヒトだけの特権である。昨年2月の新聞に「大学生4割『読書ゼロ』」とあった。本稿では、このような人達に読書の面白さを味わってもらいたいので、私自身が読んで「これは、面白い」と思ったものをいくつか紹介しよう。

まずは本川達雄『ゾウの時間ネズミの時間』（中公新書、1992年）。皆さんは動物のサイズ（重さで表記しても誤差は無い）と動きに要する時間に何か関係があると思われるだろうか？ゾウとネズミを考えると、ゾウはゆったり動き、ネズミはチョコマカ動くことは確かだけど、数式で表されるような規則性があるかどうか？と考えて調べた人がいるのだ。調べたのは様々な動物の心臓の鼓動の時間と体重の関係。なんと規則性があり、鼓動の時間は体重の1/4乗に比例することが判った。

体重が16倍になると2倍の時間がかかるというわけだ。こんな風にいろいろ調べると実に多くのことが「へエ、そうなんだ！」となって興味津々である。

次は算数、有田八州穂『大人のほうがてこずる算数』（すばる舎、2012年）。この本は「問題集」なので、読書とは言えないかもしれないが、判らない問題の答えをみると、「なる程、そんな風に考えれば良いんだ！」と、発想の転換の重要性に気がつく。「算数」だから小学生レベルと言って、バカにはしてはいけない。私自身いくつも間違い、GPAで言えば、とてもAはもらえない。1問だけ引用しよう。“10段の階段を「3段登ったら2段降りる」という具合に登る。上下とも1段を1歩と数えると、一番上に到達するまでに何歩必要か？”（答えは文末）

私は若い頃、山登り（というより山歩き）を楽しんだので、山岳小説は好きである。新田次郎のものは多く読んだ。その中でもお気に入りには『剣岳・点の記』（文藝春秋、1977年）。剣岳の頂上に測量の為の三角点を設置しようとする陸軍の測量隊の登山が、たまたま趣味で登山する若者のパーティーとの初登頂争いになる。陸軍のパーティーが頂きに立ってみると、実は大昔に修行僧が登っていたことが判明するというオチがついている。映画もとても面白かった。

もう一冊、山物語、夢枕獏『神々の山嶺』（集英社、1997年）。これは近いうちに映画になるようだ。上下に分冊の大作であるが、一気に読んだ記憶がある。マロリーがエベレスト（チョモランマ）の初登頂者かどうかという謎解きを横糸に個性的なアルピニストが登場する壮大な構想の小説である。マロリーは、

最終テントから山頂へ向けて歩いている姿をベースキャンプから双眼鏡で確認されているが、そのまま帰らぬ人となった。彼の遺体を発見し、ザックの中にある筈のカメラフィルムを現像すれば頂上に到達したか否か、判る筈という設定だ。

(蛇足1)「そこに山があるから」はマロリーの有名な言葉とされている。しかし、彼は「何故貴方はエベレストに登りたいのか?」と訊かれて「Because it's there」と答えたのであって「山が」と訳すのは間違いである。私はこのことを「Into Thin Air」というaudiobookで知った。読まない本もあるのだ。

最後に佐藤健太郎『炭素文明論』（新潮社、2013年）。人類が如何に炭素化合物（=有

機化合物）の確保を巡って苦勞し、また争ってきたかという観点からの世界史の物語であり、決して化学の本ではない。登場するのは、食料、砂糖、香料、旨味成分、麻薬、酒、爆薬、石油、肥料等々であり、今でも人類はその確保に汲々していると言って差し支えない。

(蛇足2) ダイヤモンドやカーボンナノチューブは炭素そのものである。

Quizの答え：1段登るのに5歩、したがって答えは5×10=50ではない! 7段目まではこの計算で正しく35歩。その後3段登ると一番上に着くので、答えは5×7+3=38です。



## 収集、分類、そして整理

柳田 芳伸

(附属図書館館長)

旅先の土産店の店頭でふと美しい絵葉書 (picture post card) に見入り、買い求めた一葉に旅情をつづり、肉親や知人に宛てて差し出す。受け取った方は家にいながらも、そこに刷り込まれた風光明媚を楽しみ、想像を逞しゅうする。誰も一度ならずこうした体験をもっていよう。絵葉書は1867年にオーストリアで初めて発行されたとされている。それは、19世紀中葉からの写真や休日旅行の大衆化と軌を一にしている。それにもまして、確立されていった公教育制度や、1875年10月の万国郵便連合 (Universal Postal Union) の創設 (本部はベルンにあり、日本は1877年に加盟) に負うところが大きいと言えよう。大多数の人々が読み書きできるようになり、余暇に鉄道を用いて訪れた各地の行楽地から、手頃な均一郵便料金制度を利用して、購入した多種多様な絵葉書を続々と発信したのである。1913年までに、実に50億

通もの絵葉書が遣り取りされ、文通の大ブームとなったのである [ヴィンセント、北本正章監訳『マス・リテラシーの時代』(新曜社、2011年) 158-9、191-2頁]。

私自身、ここ数年、主にこの頃に欧米で発行、使用された絵葉書を集めてきている。それは、乾由紀子『イギリス炭鉱写真絵はがき』(京都大学学術出版会、2008年) に触発されたことである。的をとくに思想家や大学に関するものに絞ってはいる。しかし病膏肓に入るが如く、収集範囲はつつい広がり、今ではその分類と整理に悪戦苦闘している。機会があれば、いずれは、杉原四郎『切手の思想家』(未来社、1992年) や久保芳和『コインになった巨星たち〈100選〉』(創元社、2000年) を範にしながら、まとめえればと願っている。

その際には、思い切った選別と整理が必要と考えている。例えば、19世紀前半以前の絵葉書は肖像画や彫像を材にしている。これに対して、それ以降のもののお大半は原版を写真によっている。また、ルターやシェイクスピア、あるいはJ.ラスキンやレーニンのものは多種類あるけれども、J.ロックやA.スミス

の描かれたのはそうではない。私が30数年取り組んできているマルサスの絵葉書に至っては、いまだ未見である。こうした収集状況を睨みながら、自らの価値観にそって体系的に整理していくことが不可欠となる。

同様のことが知識や情報についてもあてはまるのではなかろうか。大学の図書館には、連綿とした人類の英知の所産や膨大な量の情報が集積されてきている。各個人がそれらすべてを吸収していくのはもはや到底不可能であろうし、また無用でもあろう。求められるのは、情報過多の知的メタボになることなく、自らの生き方や人間性を変化、進歩させてくれるような知恵に邂逅し、それを的確に整理できるようになることであろう。締め



として、A.マーシャルの『経済学原理』（1890年）から次の文言を援用し、頂門の一針としておきたい。すなわち、「教員たちは知識を詰め込むことをその主要な任務と考えてはならない。…性格、資質、及び活動を向上させるように教育する」ことが緊要であると戒められている〔馬場啓之助訳『マーシャル経済学原理IV』（東洋経済新報社、1967年）287頁〕。



## 図書館雑感

竹田 範義

(流通・経営学科教授)

図書館について、思いつくままに述べてみたい。まず、その構成要素を確認してみよう。図書館の構成要素は、「資料」、それを利用する「利用者」、資料の整理、保存して利用に供する場としての「施設」があり、この「施設」には、資料と利用者を結びつける役割を果たす「図書館員」がいて、図書館の機能を実現する活動を行っている。一般に図書館といえば、図書館法による「図書館」のように、「図書、記録その他必要な資料を収集し、整理し、保存して、一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資することを目的とする施設で、地方公共団体、日本赤十字社又は一般社団法人若しくは一般財団法人が設置するもの（学校に附属する図書館又は図書室を除く）をいう」とその資料を保管し利用するための施設のことである。

図書館を利用者別に分類すると、国立図書

館、公共図書館、大学図書館、学校図書館、専門図書館、その他の施設に設置される図書館となる。この中で主に大学の教育・研究に関連する図書館は、大学図書館と国立図書館であろう。日本における国立図書館は国立国会図書館である。この国立図書館の特徴の一つは、納本図書館であることである。この納本図書館は、法定納本制度により、その国の出版物などの資料を網羅的に収集・保存する図書館である。

図書館の核はやはり図書であるので、図書館の蔵書数について少し見てみよう。日本で最も多く所蔵しているのは、国会図書館で988万冊ほどである。次は大学図書館で東京大学の915万冊、続いて京都大学655万冊、早稲田大学535万冊、日本大学528万冊、慶応大学482万冊である。世界で蔵書数が最も多いのはアメリカの議会図書館で3,100万冊、大英図書館は1,331万冊で世界5位である。ちなみに国会図書館は第7位である。アメリカのハーバード大学は1,700万冊弱、またイギリスのオックスフォード大学は1,100万冊所蔵し、ケンブリッジ大学と共にイギリスの

6納本図書館の1つでもある。

社会科学系の蔵書数で見ると一橋大の245万冊のうちの半分が社会科学系図書、東大経済学部の84万冊である。LSEとして知られるイギリスの社会科学系の大学には、世界最大の社会科学専門図書館（BLEPS）があり、400万冊以上（2002年時点）の蔵書があるという。国内外を通じて大学図書館は蔵書数において上位にランクされている。大学にとり図書館は、教育・研究の中心であり、知の創造と発展の要である。大学図書館に対して調査研究すなわち情報検索と資料収集に利用者は主眼を置いている。特に大学図書館にはその専門に関わる図書を中心に所蔵されており、公共図書館とは図書所蔵の趣旨が異なる。

コンピューターの発展普及さらにはインターネットの展開により、資料の保存や情報検索には大きな変革をもたらしている。大学図書館のOPACや国会図書館の蔵書および雑誌記事検索システム（NDL-OPAC）などは、今や当然のように利用されている。調べたいことに関連する用語を入力するとたちどころに図書や雑誌記事がリストアップされる。知

りたい情報への検索が非常に容易になっているのである。資料がリストアップされたら、その資料を閲覧したくなるだろう。そのため図書館には出来るだけ多く所蔵されていることが望まれる。

大学院生の頃の図書館のことを思い起こしてみた。日本大学経済学部図書館は、現在建替中であるが、当時3号館と呼ばれた地上10階地下3階の建物の中にあり、地下は書庫、地上3階までが図書館施設と大学院、それより上は細長い研究棟であった。当時院生の研究室はなかった。地下書庫は閉架図書であり、図書類の大半は地下にあった（現在蔵書数は40万冊以上であるが、建替中のため館外保管倉庫にある）。大学院生は入庫することができた。そこには閲覧机があり、研究室のない院生にとってここが研究室がわりとなっていた。ここで重要なことは、教育と研究の場が図書館を中心として連結されていたということである。図書館を中心とした必要な資料を検索し、必要な時に提供されるシステムが構築されなければならないことを改めて気づかされる。



## 本を読まないと 生き残れない時代がくる

車 相 龍

(地域政策学科教授)

元々「本」という漢字は、樹木の根もとを意味する。それが「もとになるもの」や「模範」、「基本」などの意味を表すことになり、さらには、書写に使うもとの書物を指す言葉としても使われるようになったらしい。今や書物全般を示す本という言葉の使い方はそれに由来するが、いずれにせよ、「ものごとのおおもとで、大切なもの」という語源からの教えには変わりがない。つまり、素材が木か

ら紙に変わり、さらには電子機器の液晶画面へ変わりつつあっても、時には読むものではなく、聞くものや見るものになっても、そうした本の本質は変わらない。本は、人類の知性を育むおおもとであり、人間の生き方の基本または模範を教わる大切なものであるはずだ。

ところが、昨今の世の中で本は、もはや「おおもと」や「大切な」などの修飾語が似合わないものになったように見える。本ではなくても、人間の知的成長のもとになりえる媒体はいくらでもありそうだし、ありふれた本は読み捨てても別に構わないほどである。いや、そもそも話として、分厚い本を一冊丸々読む時間的な余裕なんて現代人にはあまりない

し、最新の知識・情報をネット経由で手元のスマホでも手短かに読めるのに、執筆から出版まで時間が掛かった分、それなりに古くなったはずの知識・情報を取めただけの本を、果たしてわざわざ読む必要があるか、と反問する声もたまには聞く。さらに研究者界においても、「理系」に比べれば割と知的生産の素材かつ産物としての本を大事にしてきたはずの「文系」の若手研究者の中でさえ、「論文生産」の効率性の向上に役立たないという理由で、本を研究過程から排除しようとする傾向が強まっているほどである。

実際に、文化庁が全国の16歳以上の男女3,000人を対象に実施した平成25年度「国語に関する世論調査」の結果によれば、「読書量は減っている」と考える人が65.1%に上り、1ヶ月の読書量として「読まない」との回答が47.5%に上って最も多かった。また、読書量の減少や読まない理由について聞いたところ、最も多かったのは「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」の51.3%で、「情報

機器で時間が取られる」の26.3%が3番目であった。本好きの一人としては、本を読まなくても仕事や勉強ができるし、情報機器を弄る時間はあるけど本を読む時間はない時代の風潮に淋しさを感じる。

しかし、本を読まないとろくに生きていけない時代がくる。平均寿命100歳の時代。それは、一生4~5回は仕事を変えて行かねばならないことを意味する。ただ一度、大学で学んだことだけでは生き残れないし、だからといって、その都度大学で学ぶこともなかなか厳しい。残る唯一の道は、本を読むことしかない。本を通じて、人類の知性から学ぶ知識の裾野を広げ、数え切れない危機を乗り越えて生き残ってきた人間の生き方の基本または模範を絶えず教わること無しには、上手くやり遂げられない時代がもうすぐ到来するのだ。

本を読むのは習慣にならないと続けられない。我々は、そういう習慣を持っているのか。



## 初めて翻訳した本の思い出

西 道 彦  
(経済学科教授)

私が初めて翻訳した本のことを書こうと思います。国際貿易取引においては多くの書類が使用されます。とくにわが国のように四面海に囲まれた島国では貿易品の多くは海上輸送されることとなります。その時に登場してくる書類が昔から使用されている船荷証券 (Bill of Lading) と言われるものです。

近年、技術革新による高速コンテナ船の出現など物流の高速化が加速し、これまでの船荷証券による取引が貨物の流れに追いつかないケースが増加してきました。そこでこの船

荷証券をはじめとする貿易書類を電子化し、業務の効率化と高速化を進めるべきという機運が高まってきました。

このような動きの中で、私は貿易書類の電子化に関する文献を探していました。その時たまたま私の目に留まったのが、スウェーデンのGothenburg大学Kurt Grönfors教授の1冊の本 [Towards Sea Waybills and Electronic Documents (1991), Gothenburg Maritime Law Association] でスウェーデン語ではなく英語版でした。その本を手取るなり、一見して私の求めている本であると直観し、その場で翻訳することを瞬時に決意しました。ただこの本の著者は私が一面識ももらえない方でしたので、どうしたら翻訳の許可がもらえるのかその時は分かりませんでした。そこで今から思えば無謀だったかもしれませ

んが、直接、Kurt Grönfors教授に翻訳の許可をもらうべくとりあえず大学宛にお手紙を差し上げることにしました。しかしながら何か月待っても返事がございませでした。一度は諦めかけましたが、再度お手紙を差し上げることにしました。しばらくして大学から教授は退職された旨のお手紙を頂きました。大学にお願いして教授に連絡を取って頂き、目度く翻訳の許可を頂きました。日本でご自分の本が翻訳されることを喜んでおられました。今から考えれば、教授がお亡くなりになられる2年前のことでした。

それから私は翻訳の作業に取り掛かりましたが、船荷証券の起源から電子化まで言及されている広範囲に及ぶ力作でございましたので、作業は難航しました。とりわけ船荷証券の起源を古代ローマまで遡る学者の説なども紹介されており、私の知識の限界を超えるものでしたが、色々な方々のご協力により何とか意味を掴むことができました。この翻訳作業を通じてKurt Grönfors教授の造詣の深さを痛感した次第です。このように広範囲に及ぶ教授の御著ではありますが、その主眼は船荷証券の歴史にあるのではなく、その歴史を踏まえて船荷証券の本質をいかに電子化する

かにあります。

貿易書類の電子化を考える場合、そのEDI化だけでは貨物の安全性は担保されません。なぜならば紙の運送書類の代替としての「流通性という機能」を取り除いただけの電子式運送書類では荷主は運送中の貨物をいつでも転売可能だからです。そこでこの点を補完し、荷主が船上にある貨物を転売できないようにする仕組みが社会的要請となっていました。

このような社会的要請に応えるべく、Kurt Grönfors教授とスウェーデンの船会社は、研究の末、Cargo Key Receiptというコンセプトを共同開発されました。このコンセプトは後の「海上運送状に関するCMI規則」の基本理念として反映されています。Kurt Grönfors教授の学術的かつ社会的貢献の大きさが窺えます。

Kurt Grönfors教授が奉職されたGothenburg大学は、スウェーデン第二の都市ヨーテボリにある大学です。1891年設立の歴史のある大学であり、9の学部で40,000名以上の学生が学んでいます。私は、教授の御著の翻訳をご縁にしていつの日かGothenburg大学を訪ね、大学の図書館で教授の関係する一連の文献を調べてみたいと思っています。



## 巨人の国に行ったガリバーさんを知っていますか

有馬 弥重

(経済学科准教授)

大部分の皆さんは『ガリバー旅行記』という物語を知っているのではないかと思います。小人の国に漂流してしまった主人公が、戸惑いながらも彼らと打ち解けていき、いくつかの出来事や困難を乗り越えたのち、無事家族のもとへと帰り着くというような内容の冒険物語です。もちろん、私も小学生の頃に読み

ましたが、実はこの物語はそれだけではなく、主人公は小人の国以外にもさまざまな国への冒険を体験しているのをご存知でしょうか。

以下の内容は私が小学生の頃の記憶なので、名称や語句など細かい部分は誤りがあるかもしれません。実家には、先にも記した『ガリバー旅行記』や『小公女』、『三銃士』などをはじめ、海外の有名な物語をそろえた「世界名作集」というような20冊くらいのシリーズ本がありました。

特に本を読むことが嫌いだった訳ではありませんが、しかし私はそのシリーズ本をかなりの間開くことはありませんでした。なぜな

らば、その挿絵が苦手だったからです。シリーズ本は、1ページ分をまるまる使ったカラーの大きな挿絵が何箇所も入っていたのですが、絵のタッチが妙に生々しいというリアルというか、小学生低学年の頃の私にとっては、少々おどろおどろしい怖い感じのものだったのです。(後で思い返してみると、それはたまたま開いた本のページがそういう怖い内容の箇所だったのかもしれませんが。)

しかし、何かのきっかけでそのシリーズのある本を読んでみたところ、読んだことのない知らないタイトルであったにもかかわらず、「この人(登場人物)、何か知っているなあ…」と思いがたることがありました。実はそれは、『若草物語』の続編だったのです。『若草物語』は主人公である4姉妹の父親が戦争から帰ってきて、家族みんながそろそろという喜びの場面でだいたい終わるのですが、実は原作では、4姉妹がそれぞれ成長して自分の家族を持ったり、生き方に悩んだりしたりという後々の物語も続いていたのです。それが『愛の四姉妹』という邦題のものでした。そしてそれをきっかけに、私はその「世界名作集」シリーズ本を読みあさるようになり、さまざまな物語と出会うことができました。

『ガリバー旅行記』に関しては、小人の国

のほかさまざまな冒険がそのシリーズ本には描かれていました。主人公の方が逆に小人になってしまうような巨人の暮らす国、不老不死の国、馬が世界の中心で人間(によく似た生物)を飼っている国などです[阿刀田高『あなたの知らないガリバー旅行記』(新潮文庫、1988年)という本もあります]。

また、日本では有名な「母を訪ねて三千里」というアニメがありますが、もともとこの物語は、別の物語『愛しのクレオ』(もしくは『クレオ物語』)というような邦題だったような…)の中に出てくる挿入話のひとつだったようです。このように、日本で一般的に知られている内容がすべてという訳ではなく、実は原作では続編があったり、異なった形態であったりというものも意外と多いようです。

最近ではシリーズ化された続編はもちろんのこと、スピンオフといったような形式で、もとの内容から派生したさまざまな物語も多くあるようです。みなさんも、そのような一般的によく知られた部分のみではなく、実は〇〇だった、というようなあまり知られていない部分も探してみると、物語をより深く楽しむことができるのではないのでしょうか。是非いろいろと探してみてください。

## 本の紹介

神 保 充 弘

(流通・経営学科教授)

今回紹介させていただく本はマーケティング史研究会編『日本企業のアジア・マーケティング戦略』(同文館出版、2014年)です。本の紹介に入る前に、編者であるマーケティング史研究会について少し触れておきたいと思います。マーケティング史研究会は、マーケティング史やマーケティング学説史など、

マーケティングに関する歴史的研究をすすめ、その研究水準の向上と発展に寄与することを目的として、1988年に、全国から同学の士が集い、発足した研究者集団です。私の恩師がこの研究会の発起人の1人として名を連ねており、その恩師の勧めもあって、私自身、大学院生時代の1995年に入会することになりました。この研究会はこれまで研究報告会の開催や著作物の刊行を行うなど、地道で真摯な研究活動が続けてきています。このうち、著作物については、実践史シリーズ、学説史シリーズ、翻訳シリーズを3つの柱として数

多くの本を刊行してきたのですが、今回ご紹介する『日本企業のアジア・マーケティング戦略』はマーケティング史研究会発足25周年記念企画として編まれることになったものです。

さて、この本はアジア市場における日本企業のマーケティング戦略の実態とその特徴を解明したものです。学術書ではありますが、専門家だけではなく、ビジネスマンや、大学生・大学院生の方にも興味深く読んでもらえるように工夫がなされています。これまで、国際マーケティングのテキストといえば、先進国市場を対象としたものが多く、近年クローズアップされている新興国市場、とりわけアジア市場を対象とした日本企業のマーケティングに関する研究書はほぼ皆無に等しい状況にあったのですが、この本では、そのような研究史の空白を埋めるべく、アジア市場の中間層に焦点を当てて分析を試みています。

この本は「第1章 総論」、「第2章 自動車企業」、「第3章 家電企業」、「第4章 化粧品企業」、「第5章 食品企業」、「第6章 外食企業」、「第7章 中堅外食企業」、「第8章 小売企業」、「第9章 宅配便企業」、「第10章 企業のBOPビジネス戦略」の全10章で構成されています。この本の特徴として、5つの点を挙げることができます。第1に、従来内需型産業と呼ばれてきた食品産業、流通業、運送業、サービス業のような企業まで網羅している点です。また、従来は海外進出と言えば、大企業を対象とした研究が中心でしたが、中小企業の進出実態についても触れられています。第2に、1社だけのケース・スタディにとどめず、複数の企業を取り上げ



分析している点です。同じ産業においてもその企業の歴史や企業文化の特徴によって海外進出の仕方は必ずしも一様でないことを明らかにしています。第3に、

マクロレベルの客観的分析を踏まえ、個別企業の商品企画・開発戦略、価格戦略、ブランド戦略、コミュニケーション戦略、チャネル戦略などのマイクロ分析まで立ち入り、分析している点です。第4に、新興国市場の中間層以下のセグメント (Base of the Pyramid) にも注目し、市場創造の重要性についても触れている点です。第5に、現状分析にとどめないうで、日本企業のアジア進出の歴史的経緯と将来の展望についても触れている点です。

ちなみに、私自身、この本の「第4章 化粧品企業」を担当しています。近年、大きく成長を遂げつつあるアジア化粧品市場のうち、とくに中国に焦点を当てて、日本の化粧品メーカーの国際マーケティング戦略について検討しています。

今後、アジアがますます世界の中心になっていくであろうことはほぼ間違いないように思われます。その中で、この本が、これからアジアに目を向け、学ぼうとする学生のみならず、知的好奇心をくすぐるとともに、幾らかの学問的刺激を与える存在になってくれることを期待しています。

◆附属図書館HPアドレス <http://sun.ac.jp/center/lib/sasebo/>

- 当館は本学学生以外の方でも県内にお住まいの15歳以上の方は利用できます。
- 開館時間／平 日：午前8時30分～午後10時まで (学生の休業期間中は午前9時～午後5時まで)  
土曜日：午前9時～午後5時まで  
休館日：日曜日・祝祭日・開学記念日 (6/4)

編集・発行責任／長崎県立大学佐世保校附属図書館運営委員会 発行日／2015年5月8日